九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[014]史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2341049

出版情報：史淵. 14, 1936-11-20. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

彙報

九大史學會例會

六月二十八日午後一時より第二學生集會所に於て開催、長敎授の挨拶に始まり講演、晩餐會、研究發表を行ふ。

○講演會

一、明末清初のフランス・ジエスイット

長澤壽吉敎授

清の康熙帝が一六六五年羅馬法王クレメント十一世に送つた書翰を中心として佛蘭西の材料によつてジエスイット布敎の狀態を述べられた。梗概次の如し

歐亞交通は東印度會社を通じて行はれたと考へられて居るが東印度會社と性質を同じくした會社はかなりに多く佛蘭西では一六〇〇年代サン・マロに Moluccus 及 Japon に對する通商株式會社が設立され、一六〇四年には遂に舟を海上に浮べるには至らなかつたがブレストに佛蘭西印度株式會社が設立された。次に一六五八年には布敎と同時に何等か有用な事即ち三〇〇%以上の利益ある商賣を伴ふ必要ありと云ふ條件の下に支那及日本通商株式會社が、又一六六〇年には東洋通商株式會社が、一六六四年はコルベールが計劃して佛蘭西印度株式會社が出來た。此の會社の所在と其の貿易の實績とは不明であるが此の會社の設立された時を以て初めてジエスイット布敎と通商とが分離したと考へられる。

然るに此の時代—明末清初には別箇の布敎が別箇の傾向を以て歷史上に現はれて來る。それは天文數理の學と通商との兩方と握手して布敎が始められたことである。數理の學と提携した事は昔のマテオリッチ（利瑪竇）の時代に復歸したと云ふ可きで明末清初の佛蘭西の數理學者はアダム・シヤアル（湯若望）、フエルビースト（南懷仁）があつた。此の以外のフランスジエスイットはクリスト敎的意識が強すぎ支那の風習と馴染まない事が多かつたが、當時のジエスイット敎徒は兩意論的議論が多く其の點支那思想界と衝突したものと思はれる。其の上ドミニコ派、フランシスコ派の布敎師も支那に來つて互に相爭つた事も問題を起す一因であつたかもしれない。又明末清初にマカオの佛蘭西

ジエスイツトの僧正が明を援けた事も清の感情を害し一六六五年（康熙四年）にはキリスト教徒の大迫害が企てられ布教師は殆ど國外に放逐された。併しアダムシャールは其の數理の學によつて再び支那に迎へられかくて布教其のものは壓迫されたが其の相提携せる數理學によつて布教の復活をみるに至つたのであつた。

此のキリスト教徒迫害の年一六六五年付で康熙帝が羅馬法王クレメント十一世に送つた書翰の飜譯されたコツピーが佛蘭西外務省の古文書中に在る。「日月と光を爭ふ支那の王より法王に送る。此の手紙は清淨な駄鳥の羽根を以て書くものである。皇帝は支那の帝位の後繼者の幸を計る爲に法王家の娘と結婚し度い（中略）斯くて法王の家と支那帝王の家とは永久に結合され同時にジエスイツト布教に關する王家と帝王との爭は今後全く平和に繼續さる可きである。」と云ふのであるが此の書翰は年代の點に於て喰ひ違ひがありクレメント十一世の即位は一七〇〇年で書翰の日付と矛盾するが宛も一六六五年はクリスト教徒迫害の年で此の形勢を打解する爲に又支那布教の狀態を都合よく報告する爲に此の文書が僞作されたのではないと考へられ當時のフランス・ジエスイツトの狀態の一端を伺はれる。又ヨーロツパに於てもジエスイツトはソルボンヌ大學で神學上の論爭に敗れて佛蘭西を逐はれ又英國議會は四回に亘つてジエスイツト教徒放逐を議決し和蘭、伊太利に於ても亦同じ形勢で明末清初のジエスイツトは慘憺たる狀態で此の年代の符合せぬ書翰も此の狀態から生み出されたのではないかと思ふ。

一、美術に於ける歷史的樣式

矢崎美盛教授

美學の見地から歷史に觸れてみたいと前提され改造（本年度一月號）に執筆された「樣式の問題」を敷衍され更に平明に左の要旨の御講演があつた。

哲學的に美の理想を最初に設定して天降り的に美的鑑賞、體驗を扱ふよりも實証的に美術史を基礎に置き美の鑑賞及び美の種々なる體驗が取扱はれなければならない。

美術史の任務は事實の集積の點に盡くるものではなく又作者作品を列傳體に並べ作者と作品、作品成立の環境を述べ其の作品を種々に論ぜんとするものもあるが美術史を一の科學として取扱ふ上には美術と云ふ藝術其のものの歷史的、自律的展開が問題となる。

藝術作品は非歷史的存在として鑑賞し得ると共に一の藝術作品は又歷史的存在である。歷史的存在として藝術作品を考へる場合には表出の要素と表現の要素とが考へられる。藝術は其の時代の宗教思想等に依つて

規定されたものとしての表出要素を有し而して表現の差異によつて樣式の相違が現はれるが表出要素は美に對しては中間的で美しいものでもあり然らざるものでもあり得る。一の藝術を藝術たらしめてゐるものは表現要素で表出要素は表現要素を規定するものではない。

藝術の樣式は其の時代の氣分、信仰、作者の性格によつて規定される。即ち一時代の樣式は宗敎、信仰等の反映表出であると考へられて居る。此の考へ方には多分の眞理があるが、藝術殊に造形美術の樣式は判然と見得るものであり、氣分信仰等の樣式に移行する規定關係は漠然としてゐてそれのみでは藝術の樣式は說明し盡されない。

此の問題が藝術の自律性の問題と結合する時これは非常な重大さを加へる。例へば源氏物語の解釋に於て表出要素が樣式を規定すと云ふ考へ方に立てば作者の生活環境、人格、平安朝の社會、宗敎、信仰、社會觀、人生觀等が源氏の背景を爲すとされるのであるが作者の生活環境等々それ自身は文學ではない。即ち藝術作品を藝術でないものによつて說明せんとする時それは文學そのものゝ發展の歷史ではなくその文學を生み出す社會、背景の歷史に過ぎない。即ち其處に於ては藝術の自律性は失はれて居る。此處に藝術史に於ける樣式の問題の重大さが存在する。

此處に於てか表出要素と表現要素との間の漠然たる解釋の混亂を避けて更に判然と樣式を把握しなければならない。併し豫め抽象的に或る種の歷史哲學を造り上げ其處から天降つて實在たる藝術作品を暴力的に押込めて了ふ事を排する。實證的藝術樣式の把握と解釋を通して眞の歷史哲學は建設され逆に藝術樣式の如きを眞に把握し來る事が歷史哲學の基礎である。然らば實證的に樣式は如何なるものとして見られるか。純粹に悟性的な藝術は存し得なし得ないから其處から感性の構造を研究對象として樣式の問題を論ぜんとする考へ方が成立しようと思ふ。然し吾人は今日ギリシヤ人の感性を心理學的に研究することは出來ないが故に此處に空間時間の配列、切り取り方に迄樣式解釋の問題は進展して行く。

樣式の見地よりすれば、哲學と藝術とは併存の關係に在つて親子の關係ではない。藝術の樣式を實證的に判然と把握すれば即ち歷史の本體其のものに肉迫し得るであらうし藝術の樣式を通して一の歷史哲學を建設し得ると思はれる。

要するに表出要素によつて樣式が規定されると云ふ考へ方、時代の氣分宗敎思想人生觀世界觀等によつて藝術の樣式が規定されるとして說明し來つた從來の方

法は非常な困難を伴つて居る。そう云ふ表出要素により表現要素が規定されるといふ考へ方は捨てなければならない。然らざれば藝術の自律的法則を理解することは出來ない。逆に樣式は實證的であるから樣式を判然と把握することは樣式問題のみならず歷史哲學にも肉迫し得るであらう。かゝる方法で無力な哲學的な歷史哲學の方法を排除し得、始めて科學的に歷史本來の法則性に進んで行く事が出來るのではないか。

○研究發表

金澤文庫本往生傳に就いて　　靑木義憲氏

金澤文庫未整理本中の前後を欠損せる鎌倉末書寫と推定さるゝ往生傳に就いて紹介あり。平安朝六種の往生傳に比して淨土敎的色彩の濃厚なること、九品寺流分派の關東傳播を推定せらるゝ點等を述べらる。

東北地方見學談　　鏡山猛氏

最近東京東北等の諸大學研究室見學の旅行より歸られた同氏は平泉金色堂、毛越寺、多賀城址等の遺蹟に就いて御發表あり。

淸朝の實錄に就いて　　井上以智爲氏

先づ一、滿洲實錄二、武皇帝實錄三、羅新石本四、塗改本五、高皇帝實錄の各種ある事を述べられ其の內容より成立年代の前後を推定され又我が國に於て寬政年間に「大淸三朝事略」が、更に「大淸三朝實錄採要」が文政十年に出版された事等に就きて御發表あり。

（文責在記者　檜垣）

受贈圖書雜誌（自昭和十一年六月至同年十一月）

讃岐史壇	創刊號
京城帝大史學會誌	九
史潮	六ノ二
東洋文化	一四三・一四四
最近の經濟史學會	昭和十一年六月號
地學雜誌	五六八・五六九・五七〇・五七一・五七二
現代佛敎	八・九・十・十一月號
史苑	五〇號記念特輯
皐學	四ノ二
史學	十五ノ二・三
史林	二十一ノ三
研究資料彙報	十一ノ三
國立北平圖書館彙	九ノ五・六
心の花	四十ノ七・八・九・十
國史學	二十七・二十八
筑紫史談	六十八
土佐史談	五十六
史學研究	八ノ二
歷史敎育	十一ノ七
靑丘學叢	二十四